The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	飲酒/禁酒の物語学 ： アメリカ文学とアルコール
Author(s)	森岡, 裕一
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46570
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【38】

氏　　名	森　岡　裕　一（もり　おか　ゆう　いち）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２０５３６　号
学位授与年月日	平成 18 年３月 24 日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学　位　論　文　名	**飲酒/禁酒の物語学－アメリカ文学とアルコール－**
論文審査委員	（主査） 教　授　玉井　　暲 （副査） 教　授　和田　章男　　助教授　服部　典之　　助教授　片渕　悦久

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、19・20 世紀のアメリカ文学を飲酒ないしは禁酒という観点から新しく読み直すことをめざした研究である。エドガー・アラン・ポーや 19 世紀前半に大流行した「禁酒小説」から、20 世紀のアメリカ・モダニズム文学を代表する小説家 F. スコット・フィッツジェラルド、アーネスト・ヘミングウェイ、ウィリアム・フォークナーや劇作家ユージン・オニールの主要作品にいたるまで、飲酒/禁酒のモチーフを孕んだ数多くの文学作品を取り上げ、アメリカ文化の中で形成されたアルコールをめぐる言説がアメリカ文学の展開にいかに深く関わっているかを解き明かし、アメリカ文学の特質の新しい側面を描き出した研究である。本論文の全体は、まえがき、７章からなる本論、注、あとがき、索引から構成されており、総頁Ａ５判で 226 頁、400 字詰め原稿用紙に換算しておよそ 550 枚からなる論文である。

第１章では、ポー（1809－49）の「黒猫」、「アモンティラードの樽」、ジョン・チーヴァー（1912－82）の「再会」、「緋色の引越しトラック」、シャーウッド・アンダーソン（1876－1941）の『オハイオ州ワインズバーグ』（1919）などの作品を取り上げ、アルコールが無意識の表出、狂気の発動、性的抑圧の解放などに関わるありようをテクストの詳細な読みを通して分析し、物語空間に展開する非日常の世界の意味を考察する。第２章では、19 世紀前半のアメリカに起こってきた禁酒運動と連動する「禁酒小説」の特徴とその意味をまず考察する。禁酒小説の黄金時代といえる 1840 年代に生み出された代表作品 13 篇を紹介したあと、これらの禁酒小説の中でもっとも注目すべき作品として T.S. アーサー（1809－85）の『酒場での十夜』（1854）を取り上げ、教訓性を旨とするこのジャンルの小説にアメリカ文学の重要な特徴の一つである「スモール・タウン小説」の伝統が巧みに織り込まれていることを解き明かす。第３章は、アメリカの文学・文化の世界におけるアルコールと創造性との関わりを歴史的実態を踏まえて分析し、特にボヘミヤニズムの中から生まれた「酔いどれ４天王」といえるフィッツジェラルド（1896－1940）、ヘミングウェイ（1899－1961）、フォークナー（1897－1962）、オニール（1888－1953）の存在に注目し、これらの文学者の創作活動において果たした酒の役割について考察する。第４章は、作品世界にアイルランド系の人々、黒人、ネイティヴ・アメリカンなどが登場する作品群を取り上げ、アルコールとエスニシティとの関わり考察し、この問題を考えるのに重要な作品としてマーガレット・ミッチェル（1900－49）の『風とともに去りぬ』（1936）に注目する。また、アルコール依存症の女性を描いた作品にも言及し、アルコールとジェンダーの問題をも考察する。

第５章は、フィッツジェラルドとオニールというアイリッシュ系の作家を取り上げ、この二人の文学に酒の文化がいかに関わっているかを解き明かす。さらに、この酒のモチーフに由来するテーマとして、女性表象/セクシュアリテ

ィの問題がフィッツジェラルドの『偉大なるギャツビー』（1925）において、土地（所有）に対するアイリッシュの独特な感覚がオニールの『地平線のかなた』（1920）において、それぞれ大きく浮上していることを、テクストの詳細な分析を通して明らかにする。第６章では、ヘミングウェイとフォークナー文学におけるアルコールのもつ意味を両者の代表的な作品を取り上げて解き明かし、特に前者では暴力的な死やセクシュアリティの表象において、後者では同時代の小説家シャーウッド・アンダーソンとの共作関係においてアルコールが深く関わっていることを力説する。最後の第７章では、アメリカ社会におけるアルコール依存（症）からの回復をめざす運動の存在に触れつつ、現代映画作品への言及・考察を通して、現代アメリカ文学・文化における飲酒/禁酒のモチーフのもつ重要性を重ねて主張して本論を結論づけている。末尾には、アメリカ飲酒文学に関わる文献の解題が添えられている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、19 世紀から 20 世紀にわたるアメリカ文学において飲酒あるいは禁酒のモチーフがアメリカ文学の大山脈を形成する偉大な作家たちにいかに深く関わっていたかを、両世紀を包括する大きな文化的・社会的コンテクストに目を配りながら鮮やかに解き明かした独創的な研究である。世界に類を見ない禁酒法施行時代（1920－33）を経験したアメリカは、文学世界にあってもアルコールをめぐる言説は大きな意味を孕んでいた。にもかかわらず、このテーマに真正面から挑戦した研究はきわめて少なく、まずここに本研究のもつ重要な意義を確認せねばならない。論者は、ポー、アンダーソン、チーヴァー、ミッチェルらから、「酔いどれ４天王」と論者が呼ぶフィッツジェラルド、ヘミングウェイ、フォークナー、オニールの文学を考察するに当たり、きわめて重要なことに、「飲酒」のモチーフが果たす華麗で創造的な意味のみならず、「禁酒」のモチーフのもつ抑圧的・破滅的な相をも視野に入れることを怠らず、いわばアルコールをめぐる光と影、あるいはポジとネガの両面から分析を行っており、本論に考察の幅を与えて大きな説得力を得ることに成功している。このアルコール言説の両義性を踏まえた視角は、1840 年代の禁酒小説、20 世紀の禁酒法時代というアルコール文化の否定的側面を押しつけてくる言説と文学者の創作・創造活動との葛藤・軋轢がアメリカ文学特有のダイナミズムを孕んだ文学空間を作り出しているありようを見事に浮き彫りにする。特に、T.S. アーサーの『酒場での十夜』に集約される禁酒小説の特質として当初の教訓性を旨とする世界のなかにスモール・タウン小説の萌芽を指摘し、アメリカ文学の重要な特質に結びつく一面を明らかにした分析にはきわめて興味深いものがある。

ただし、本論文において問題点がないわけではない。文学テクストの個々の分析において飲酒/禁酒のモチーフの掘り下げ方に多少の不均衡が見られるのが惜しまれる。また女性作家と飲酒/禁酒との関わりの考察も今後の課題となろう。

しかし、これらの点は本論文の優れた価値を損なうものでは決してない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。